Rikio TAKAHASHI* : On the Relation between Children's Play-life and Play-ground

§1 まえがき

児童公園の計画及び設計は、児童の「遊戯生活」を無視して行い得ないものであることは今あらためて確認するには及ばないであろう。そして夙にそのための調査や研究が、積み重ねられて、児童公園の計画設計上欠くことのできない重要な資料を提供して来た。しかしながら、それらの調査や研究が、主として児童公園を通して、つまり児童公園を媒介として、行われてきたものが多い様である。かゝる方法も、或面から云えば、勿論高く評価されるべきではあるが、児童公園が、児童の遊戯生活の展開される空間の一部である限りは、彼等の遊戯生活を充分理解するまでには及び得ないであろう。児童公園における彼等の遊戯生活なるものは、恐らく氷山の一角に過ぎず、彼等は児童公園以外の様々な場所で、その場所に相応しい様々な遊びを営んでいることは、容易に想像されるのである。従つて、現存する又は、これから創られていく児童公園に、彼等を誘惑するためには、児童公園以外の彼等の魅力ある遊び場を探索する必要がある。児童公園では果たされていない彼等の欲求を探知する必要がある。すなわち、我等は従来の調査や研究にのみ甘んじていないで、児童の遊戯生活全般に互つて理解し、その全貌を明らかにしていくことは、高い視野に立つて児童公園の計画と設計をすすめていくために、是非とも解決しなければならぬ課題ではないかと考える。

以上の様な意図の下に試みられたのが、此の調査である。しかし、この様な調査に於ては、極めて複雑な諸条件が附随してくるから、この調査のみから、直ちに児童の遊戯生活の一般の傾向を描き出すことは甚だ危険であるし、又、調査そのものにも、若干不備な点があつたことは、認めねばならない。従つて、次に明らかにする調査の結果は、単に中間報告の形にとどめて、漸次、調査の不備欠陥を補正しながら、児童の遊戯生活の実態をより適確に掌握できる様、更に調査を継続していく考えである。

§2 調査法の概要

(1) 調査の対象

岸和田市の中央小学校及び城内小学校 (いずれも旧市内に所在) の児童を対象とし、調査の範囲を第3学年以上の児童に限つた。低学年児童を調査から除外したのは、この調査の方法を彼等に適用することは、かなり困難

ではないかと予測されたからである。被調査児童数は、在籍児童数1736人 (但し3学年以上、且2つの小学校の合計) のうち1,006名で、総数の57%に相当する。

(2) 調査の方法と内容

児童の遊戯生活の実態を探るために必要な鍵と目される次の様な設問事項を盛つた調査用紙を配布し、児童自身に記入させた。説明及び記入に要した時間は、約30分間である。調査には、本学々生を当らせたが、城内小学校では、クラスの担任教官も立合つた。

設問の主なる項目は、次の通りである。

①ふだんの遊び友達の数

②調査の前日、学校からの帰宅後、夕方まで、数時間の間に行われた遊びについて。

i) 遊びの種類

ii) 遊んだ場所

iii) 一緒に遊んだ人の数 等

③夏休み中のふだんの遊び場。

(3) 調査の期日

1957年 (昭和32年)

10月7日 : 中央小学校

10月10日 : 城内小学校

(4)調査地域の現況 (調査地域略図参照)

両学校区共、岸和田旧市街の中枢部を占め、人口密度は、中央小学校区の方が、はるかに高い。両区の人口、人口密度は夫々次の通りである。(昭和30年現在)

中央 9,800 人 ; 170人/ha

城内 10,100人 : 861人/ha

又、中央校区は商店街の形成が多くみられるが、城内校区の方は、むしろ住宅街をなし、且、校区の南部は畑地が多く眺めは閑静である。どちらも海に面しているのであるが、砂浜は巾狭く又、決して綺麗ではない。海水浴には向かない。両区を狭んで存在する、面積12,000坪ほどの城趾公園 (天守閣は戦後復興¹が唯一の緑地で、その他に、略図に載せた神社仏閣等が、子供の遊び場として市内に点綴しており、中でも蛸地蔵には遊童施設がとゞめられている。

§3 調査の結果と検討

子供の「あそび」が繰り広げられる場所、従つて、その場所によつて規定され易いと予想される「あそび」の型又は、種類といったものは、子供の性別、年令別等によつて異なることは申すまでもないが、又それと同時に、

* 大阪府立大学農学部 : Osaka Prefectural Univ.

環境条件——都市環境居住環境等——に左右されることが甚だ大きいと考えられる。岸和田市のこの2つの学校区も、相隣り合っていて、環境条件に共通した点もあるが、又かなり相違している点も指摘しておいた。しかし、今度の調査では、その点に関する充分な分析をなし得なかった。特に児童一人々々の住宅環境を知るための資料は集めていない。従つて、環境条件等を考慮した分析は、次の機会を俟つて、すゝめてゆたいと考えている。

一体、子供の「あそび」が環境条件に左右されることが大きいということは、言葉を換えて云えば、「あそび」の環境に対する順応性が高いということになるであろう。それは、つまり子供の遊戯生活圏とゆうものが、かなり狭い領域にとどまることを予想させる、そして、距離的制扼をのり超えていくその生活圏の拡大は、欲求される遊戯行為を充分満足せしめるような要素が、彼等の周囲に欠けてるか、或は、彼等の欲求を唆る様な場所が、その領域外に提供された様な場合等に起り得るものではないだろうか。

以上述べた事柄は、今度の調査の結果に於ても裏書きされているとみて差支へないであろう。すなわち、色々な「あそび」のうち、約67%が、自宅又は、自宅周辺において営まれている。しかも、かなり広い空間を必要とする野球、ドッチボールの類も、空地の少い自宅周辺で展開されているのが実情である。(第3表)のこり33%にしても、学校、広場、砂浜社寺境内等であつて、た

とえ学校区外に出ることがあるにしても、おそらく行動半径500mを越すことは、ごく稀ではないかと推測される。特にこの傾向は女子において強く顕れており、年齢層間の相違は、不明であつた。(第1表)

更に一步近づいて結果を眺めてみると、比較的狭い環境条件に適応した遊びの型が撰ばれている傾向がうかがえる。第2表の中で、女子においてのみ高い比率を示す「玩具」優勢な「その他の遊び」がそうした型に属すると考えられる。この2種類の型は、いずれも室内か又は、それに直接する居住環境内で営まれている遊びである。(第3表)

この様な事実は、空地率の低い環境条件が、極めて狭い空間でも利用できる様な子供のあそびの型を規定しているであると説明することができるかもしれないが、又一方において次の様な仮説が成立しないであろうか。すなわち、一部のあそびを除けば、或一定の広い空間とゆうものは、子供のあそびにとつては、さして重要な条件ではなく、むしろ、あそびの型によつては、狭い小空間、又はその様な小空間を断続的に連ねた特殊な空間の方が、その目的に叶つてはいないだろうか。第4表によつて、もう少し詳しく検討を加えてみると、女子に多い「固定的静的」なあそびが狭い空間——しかも、なるべく外部からの干渉をのぞまぬ様な閉鎖的空間——を要求するであろうし、男子に多い「流動的動的」なあそびは、建造物等によつて、小さな空間に分断されて複雑化した空間の方が、何も障礙物のない広い空間よりも好んで撰択される可能性がありそうである。「玩具」も亦、「固定的静的」な型と見做せるであろう。従来の児童公園における利用調査をみると、いずれも飽和度に達している例が少いと報告されているが、その原因の一つには、児童公園が、上記の様な型の空間を提供していないということにもよるのではないであろうか。

更に、こゝで提起しておきたいもう一つの問題がある。各種各様の遊びの型に対応した児童公園の設計が必要なのは、申すまでもないが、しかも尚且、児童の遊戯生活圏が狭いということは、公園設計上の改善そのものによつて問題が解決されるわけではなく、依然として残る。それは、すなわち、都市計画——特に道路計画、住宅計画、コミュニティー計画——に対してその解決を求めなければならぬ課題であろう。住宅に極めて接近した周辺部に遊び場を求めるとゆうことは、我が国の場合、多かれ少かれ、それは、道路を利用することを意味するであろう。すなわち、住宅が直ちに街路一時には交通の激しい街路——に面しているのが、これまでの都市の現状である。恐らく、今後、道路の利用形態上からの分離、住宅と道路との関係といった問題を、都市計画上から考察していかねばならないであろう。Richard Ariele の指

摘してゐる如く、Durchgangstrasse から Wohnstrasse へ
という考え方は、遊び場の問題を解く鍵として傾聴する
に値するであろう。一部で云はれている様な Street Pla-
yground は、決して積極的な解決ではなく、住宅計画の
欠陥を一時的に糊塗する施策以外の何ものでもないと考え
える。連続住宅において採られている Communal garden
などは、恐らく、遊び場の点からみて、興味ある一つ
の解決策といえないこともないであろう。

遊戯時のグループの大きさは、遊び場空間が広くなる
につれて、大きくなる傾向はある様であるが、一般に、
男女共に小さいことが、みとめられた。(74%が1~5
人) 児童心理学上の諸研究によれば、年令別、性別によ
つて異るとも云はれているけれども、こゝでは充分明ら
かな差はみとめられない。友人の数も、1~6人までが
60%を占めており、これは、上述の遊戯時におけるグル
ープの大きさと密接な関連性をもつてであろうことが推察
され、この様な規模は、狭い空間における遊びの型に対
応した大きさであると考えられ、遊戯時のグループ間の
和合、干渉と云つた面から、児童公園設計上、更に実際
に彼等の生活に接近して究明していくべき課題であら
う。(第5表、第6表)

次に、夏休み中の主な遊び場を挙げてもらつた結果を
まとめたのであるが、(第7表) 学校区間の差は第2表
の場合と同様、不明瞭である。又、学年間の差も顕著で
なく、男女間に差があらはれている。すなわち、やはり
女子の場合は、その居住環境の狭い圏内にとどまるの
に対して、男子においては、遊び場に相当多様性を帯びて
くる。表中の「社寺、学校、空地」「海辺」「野原、川
池、森」など、女子に比べて格段のひろきを示し、この
3つの範疇の合計は、全体の59.5%に及んでいる。上記
の3つのうち、自然的要素の卓越した後者の2つは、全
体の1/3を占め、自然的環境の中における遊びが、大きな
比重をもつてくる点は、注目しなければならないだろ
う。これは、岸和田市の立地条件、又は季節的条件をそ
のまゝ反映した姿であると云つて、済ましてしまうこと
はできないであろう。児童の遊戯生活環境に、自然的要
素を含むという事は、案外重要な意味をもっているの
ではないかと考へさせられるのである。特に男子におい

て、その嗜好性が強く、何か彼等の好奇心にうつたえる
豊かなもの、複雑なものが、自然の裡に用意されている
のではあるまいか。しかし、乏しい調査の結果から、直
ちに斯く解釈することは、危険であるが、1949年、
文部省で行つた児童のあそび調査の結果でも、男子に於
ては、年令の如何を問はず、「魚つり」「魚とり」が可
なり上位を占めているという事実は、心にとどめて置く
必要があらう。いづれにせよ、自然的環境の確保は、都
市の風致的、保健的観点ばかりでなく、この様な視点か
らも、必要であることが、痛感させられる。錯然として
建物が密集して変化にとみ且危険性の多い都市の姿が、
かつての丘や流れやしげみによつて多様性を賦与されて
いた自然の姿と何らかの共通した類似性をもつてい
るならば、後者をうばわれたものが、前者に奔るの
は、決して偶然ではないであらう。殊に、男子に多くみ
られる流動的性格をもつ遊びの型が、遊び場の環境にこ
の様な複雑な要素を要求するものであるならば、今日の
市街環境の代りに、再び自然を、子供のあそび場として
奪回してやることは、一層、重要なことである。

§4 調査に対する反省

以上調査の結果を報告し且検討を加へながら、結論め
いたことを述べて来たのであるが、実はそれは結論でな
く、こゝで筆者の意図したのは、調査の結果から、今後
明らかにしていかなければならないいくつかの課題を提
起することに在つたのである。従つて、以上挙げてみた
諸問題を解き明かすために、更に調査の方法や内容に関
して技術的に改善を行いながら、調査をすすめていき
たい。恐らく次の様な点を吟味する必要がある。

- (1) 調査を低学年までに及ぼしていくための工夫が必要
である。
- (2) 環境条件を考慮に入れて分析していくこと。
- (3) 季節的条件を無視することはできない。
- (4) あそびの型は、調査の目的に即応した妥当な分類の
方法を考究してみることに。
- (5) 遊戯生活の行動圏やその行動の軌跡を、より具体的
に追求してみることに。

(15頁より)

築という手に触れるものゝうちに読みとることが、建築
史を学ぶことであろう。あるいは遠く古いものの中に、
あるいは広くはるかなるものの中に人間生活のあり
方と建築との係り合いを探つて今の我々の求めている
建築の姿を正しく見出すこと、これが建築家の建築歴史
を学ぶ目あてであろう。」以上3人の学者の言葉を引用
しながら、論を進め建築教育の大半は建築を小さく解

体細分して扱う学問であるが、建築史は建築を一個のま
とまつたものとして綜括学な考察批判を行なう学問であ
り、言わば建築学全体のしめくくりをする学問でもある。
こういう風に考えていけば、建築史は一見まるで実用
的でない学問であるけれども、実は根本的に大切なもの
である。学問の価値を定めるのに、実用という目さきの
理由のみによるべきでないことが明らかになつたかと思
う。(田中 正大)

(才1表) 性別、学年別による遊び場空間の型

性別	学年別	遊び場の型	屋内	屋外A	屋外B	計
男子	3	3	45	48	89	182
	4	4	55	55	101	211
	5	5	80	58	88	226
	6	6	44	37	60	141
	計	計	224	198	338	760
	(%)	(%)	(29.5)	(26.0)	(44.5)	(100)
女子	3	3	116	35	43	194
	4	4	119	72	43	234
	5	5	112	50	52	214
	6	6	72	29	30	138
	計	計	426	186	168	780
	(%)	(%)	(54.7)	(23.8)	(21.5)	(100)
合計		合計	650	384	506	1540
(%)		(%)	(42.2)	(24.9)	(32.9)	(100)

(註) 屋内：友だちの家も含む
屋外A：公園、家の外周、道路等
屋外B：学校、公園、空地、神社等
数値はあそびの件数を示す。

(才2表) 性別、学年別及び校別による遊びの型

性別	学年別	遊びの型	本を 読む	テレビ 視聴	図画 工作	ゲーム	玩具	球 戯	競 走	遊 戯 機	自転車 のり	動物 物探	その他 遊び	計
男子	3	3	16	5	0	10	7	27	12	3	4	19	79	182
	4	4	21	5	10	10	14	28	10	4	10	28	71	211
	5	5	21	15	6	20	2	34	13	5	7	19	84	226
	6	6	16	5	2	12	2	20	8	1	4	14	57	141
	計	計	74	30	18	52	25	109	43	13	25	80	291	760
	(%)	(%)	9.8	4.0	2.4	6.9	3.3	14.2	5.7	1.7	3.3	10.5	38.2	100.0
女子	3	3	17	3	3	0	100	4	3	8	2	5	49	194
	4	4	25	3	2	6	83	4	2	16	9	5	79	234
	5	5	21	9	8	4	69	19	3	20	4	3	54	214
	6	6	30	8	4	3	24	11	2	6	8	2	40	138
	計	計	93	23	17	13	276	38	10	50	23	15	222	780
	(%)	(%)	11.9	3.0	2.2	1.7	35.2	4.9	1.3	6.4	3.0	1.9	28.5	100.0
合計		合計	167	53	35	65	301	147	53	63	48	95	513	1540
(%)		(%)	10.8	3.4	2.2	4.5	19.5	9.6	3.4	4.1	3.1	6.2	33.2	100.0
中央校		中央校	46	26	16	43	138	75	29	21	16	36	207	653
城内校		城内校	121	27	19	22	163	72	24	42	32	59	306	887

(註) ゲーム：室内ゲームを指す
玩具：「まいごい」、「人形あそび」等も含む
球 戯：野球、キャッチボール、ドッジボール等

(才3表) 「遊び」と「遊び場」の関係

あそびの型	屋内	屋外A	屋外B	計
玩具 (%)	250 (83)	38 (13)	13 (4)	301 (100)
その他のあそび (%)	98 (19)	226 (44)	189 (37)	513 (100)
球 戯 (%)	5 (0)	50 (36)	92 (64)	147 (100)

(註) 「あそび空間」は、才1表による
「あそびの型」は、才2表による } 分け方

(才4表) 「その他の遊び」細分類

分類	男子	女子	合計
1 固定静的	15 16 20 5 56	28 50 38 29 145	201
2 固定動的	12 23 32 16 83	1 0 4 0 5	88
3 流動動的	41 32 33 23 129	20 23 13 6 62	191
計	68 71 85 44 268	49 73 55 35 212	480

(註) 1. なわとび、うずまき、石けり、いちだん、まりつき等
2. すもう、うまとい等
3. かくれんぼ、おにごっこ、クレーンごっこ、たんていごっこ等

(才5表) 遊戯時におけるグループの大きさ

グループの 学年		実 数					比 率 (%)				
		ひとり	1~5人	6~10人	11人以上	計	1~5人	6~10人	11人以上	計	
3		36	253	49	18	320	80	15	5	100	
4		49	285	79	8	372	77	21	2	100	
5		48	274	101	24	399	69	25	6	100	
6		37	169	50	12	231	73	22	5	100	
小計	男	75	480	168	51	699	69	24	7	100	
	女	95	501	111	11	623	80	18	2	100	
合計		170	981	279	62	1322	74	21	5	100	

(註) 数値はあそびの件数を示す

(才7表) 昼休みにあそびの主な遊び場

遊び場	自宅 周辺	友人 宅	公園	学校 空地	海 浜	野川 池	その他	計
3	144	44	33	52	79	45	21	418
4	139	29	29	58	130	59	29	473
5	156	69	22	74	126	50	40	537
6	97	41	12	55	70	31	14	320
小男	214	48	50	170	257	129	66	934
小女	322	135	49	69	148	56	38	814
合計	536	183	96	239	405	185	104	1748
%	30.8	10.5	5.5	13.7	23.2	10.8	5.9	100

(註) 「その他」：市街地、公園前、道路、市場等

(才6表) 「あそびともだち」の数

性別	1~3人	4~6人	7~9人	10人以上	計
男子	138 (28)	162 (32)	86 (17)	115 (23)	501 (100)
女子	118 (24)	175 (35)	107 (22)	97 (19)	495 (100)
合計	254 (25)	337 (34)	193 (20)	212 (21)	996 (100)

(附記)

2号校区の在籍児童数及び被調査児童数は、下記のとおりである。() 内数字は、後者を示す。

年級 性別	中 央		城 内		合 計			
	男	女	男	女	男	女		
3 年	132 (78)	125 (68)	257 (146)	141 (62)	145 (62)	286 (130)	273 (146)	543 (276)
4 年	147 (64)	129 (65)	276 (129)	122 (73)	146 (86)	268 (153)	269 (151)	544 (288)
5 年	90 (71)	97 (70)	187 (141)	94 (67)	97 (66)	191 (133)	184 (136)	378 (274)
6 年	66 (38)	57 (36)	123 (74)	73 (40)	75 (46)	148 (84)	139 (82)	271 (168)
計	435 (251)	408 (239)	843 (490)	430 (256)	463 (260)	893 (516)	865 (499)	1736 (1006)